

【第九回】「篆書・隸書の基礎知識と書き方」

— 隸書の基本的書き方 —

横浜国立大学非常勤講師  
本誌手本揮毫者

石坂 雅彦

◇はじめに

前回までで、隸書の特徴や感覚など概略はご理解頂けたかと思えます。

今回は、もっとも隸書らしい漢碑の文字八分を中心にした隸書の基本的書き方を解説してまいります。

をとることも忘れないでください。

■横画

起筆は逆筆藏鋒になります。丸め込むようにしますが、篆書との区別として、図1のように小さな三角形を書くように丸め込みます。送筆に移る前に瞬間止まるようにし、チョツと構えるようにして送筆に移っていきます。

送筆は起筆からの調子でやや上に向かい、そして山なりに下げる波勢のリズムを作るようにします。

最後の収筆は、ほぼ起筆の位置まで下がって来たら、止めて確り構えてから右上方方向に元氣よく跳ねあげるように抜いていきます。立派

図1

な髭になるようにして下さい。これが波磔です。

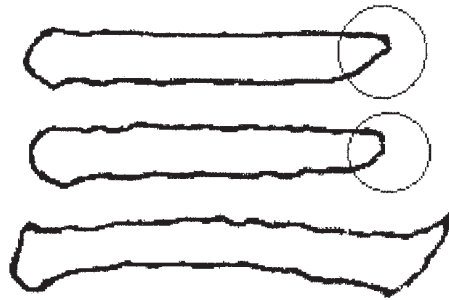
ほぼ揃う



まずは、肩肘の力を抜いて、気持ちだけ緊張させて、古代の漢時代の人間になったつもりで書くようにしましょう。筆の持ち方や姿勢は篆書の時と同じ懸腕（脇を空け、肘を宙に懸ける）双鉤法（人差指・中指を懸ける持ち方）で筆をよく立てるようにします。背筋を軽く伸ばし、紙面全体がよく見渡せる姿勢

波磔の付かない短い横画や目立たない横画は、  
 図2のように収筆を軽く止め、瞬時に筆を紙か  
 ら離すようにします。或いは軽く抜くようにし  
 てもよいでしょう。ともかく目立つような飾り  
 は付けないようにします。

図2



■ 縦画

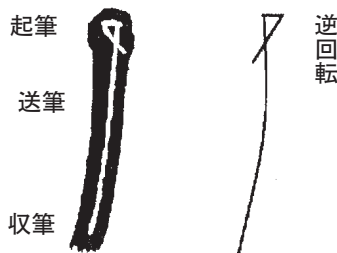
基本的に横画と同じように、起筆は逆筆藏鋒  
 で行います。横画を縦にしたものと考えてもよ  
 いかと思います。唯、三角形の回転は図3のよ  
 うに右回りでも、左回りでも、その時の調子で

やり易い回し方をしてください。

送筆は波勢の表れとして、やや反り気味にす  
 るとよいでしょう。

収筆は、楷書の撥ねに当たるところは左にク  
 イッと突き出すように曲げます。楷書の止めや  
 抜きに当たるところはやりっ放し状態、つまり  
 筆が止まったら瞬時に紙から離すようにします。

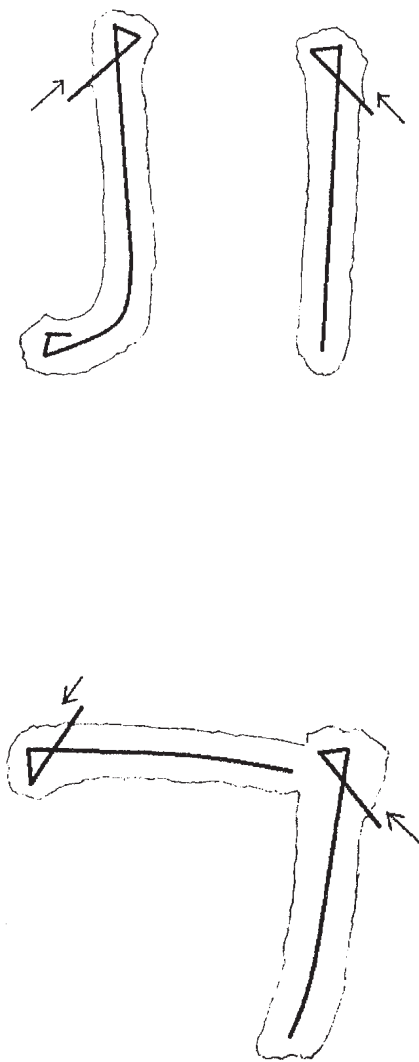
図3



■ 転折

横画と縦画が組み合わさったところです。楷  
 書体ですと、あたかも人間の関節のような仕組  
 みで曲げますが、隸書では横画に縦画をくっ付  
 けるようにします。図4のように横画は横画で

図4



書き終わり、その収筆から改めて縦面を書くようにします。ですから、「口」の画数は、楷書では三画ですが、隸書では四画に書くようになります。隸書独特です。

■ 斜画

図5のように、左へ向かう斜画は軽く起筆してから徐々に筆圧を大きくして、収筆はグイッと突き出すようにし、軽く戻すようにするといでしょう。

一方、図5で判るように、楷書の右払いに当たる斜画は収筆が波磔になります。

■ 撥ね・払い

基本的に、楷書における撥ね・払いは無いと考えるとよいでしょう。

楷書における撥ね・払いに当たるところは、縦画や斜画のところで説明したように、左に突き出すようにします。また、楷書の右払いや「匕」のような撥ねは波磔になります。図6でお解りいただけるかと思えます。

図5

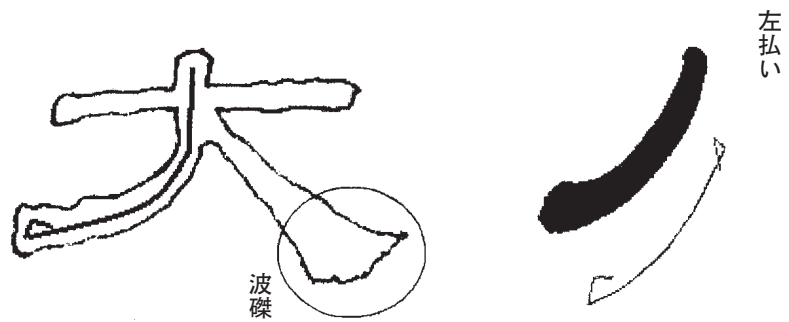


図6



■ 点

点も線のうちと言いますから、点を打つというよりは極短い線を引くという感覚がよいかと思えます。

冠かむりや麻垂まだれ・鍋蓋なべぶたなどの点は、図7のように

逆筆藏鋒で起筆して、左下方向に軽く抜くようにします。

図8の烈火れつかなどの四つの点は、原則的に一、二番目の点は左下から右上方向に書き、三番目の点は上から下方向に書き、四番目の点は右方向に波磔気味に書きます。

図7

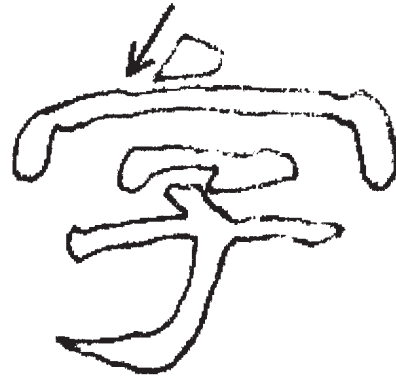


図8

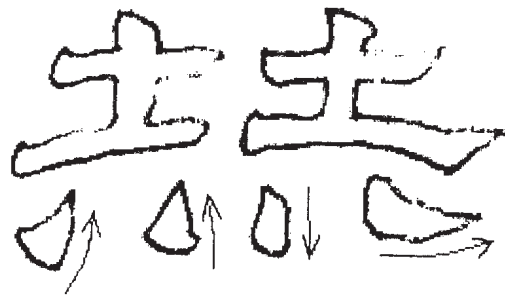


図9  
乙瑛碑



禮器碑



曹全碑



さあ、これで隷書は書けることになりましたが、ここで説明したものは、標準的な「基本的書き方」です。色々な隷書の古典を見ますと、多少違いはあります。例えば、図9の「之」の波磔に注目して下さい。乙瑛碑は太く力強いです。禮器碑は細く鋭く華やかです。曹全碑は滑らかに伸びやかで艶っぽいです。

この波磔のように、古典によって趣は勿論のこと、書き方にも多少違いがあります。しかし、書き方の原則は同じですから、筆圧のかけ具合や止まり方、構え方の具合の違いなどをよくご覧になって、工夫されれば問題なく楽しく書けることになるかと思えます。